

田川地域における高校生の子育てについての意識調査

細井 勇・古橋 啓介・秦 和彦・林 ムツミ・本多 潤子

要約 本研究の目的は、少子化傾向の中で子育て体験が代的にどの程度継承されているか、子育て体験の有無は赤ちゃんへのイメージや子育ての充実感・負担感に影響を与えるか、学校における子育てに関する教育の実態、高校生の理想の家族像や性別役割分業意識の実態等を明らかにし、子育て支援の在り方に示唆を得ることである。このため、田川地域における高校生を対象に子育てについての意識調査を実施した。

その結果、以下のことが確認された。少子化対策として性別役割分業観の改善が強調されているものの、性別役割分業観が代的に継承されていること。ほとんどの高校生が子どもを育てたいと思っているものの、「育てたいと思わない」「わからない」との回答の背景に、性別役割分業観が影響していることがうかがえること。少子化傾向が、子育て体験の代的継承を困難にしていること、また、子育て体験の有無が、赤ちゃんへのイメージや子育ての充実感・負担感に影響を与えていること。さらに、学校での子育て教育が体験学習として導入されてきてはいるものの、男性について子育て体験機会の保証につながっていないこと。

以上の結果から、子育て不安への対応として、子どもが生まれてからの親となった大人への対応策だけでなく、親となる以前の段階での子どもの成長・発達に即した子育て体験の保証こそが、有効な対応策となること、より具体的には、学校における子育て教育として、性別役割分業意識の改善を図る方向性で子育て体験学習を展開していくことの必要性が示唆された。

キーワード 高校生 意識調査 子育て体験 性別役割分業観 田川市郡

問題

急速に進む日本の少子高齢化は、大きな社会問題として認識され、ここ10年、少子化傾向に歯止めをかけるべく、少子化対策が講じられてきている。が、それは少子化への抜本対策というよりは、子育て環境の急激な変化—少子化の傾向が直接もたらす子育て環境の変化を含め—に対応しようとする子育てへの社会的支援の強化策というべきものであろう。日本の特徴と

して保育所が広く普及していることから、保育所を拠点とした子育て支援策であるともいえよう。それは、少子化への危機意識が、保育サービスを普遍的なサービスへと転換させた結果とも捉えられる。すなわち、性別役割分業観あるいは母性神話が支配的であったところでは、乳幼児の子育ては本来母親が担うべきと考えられ、保育サービスは母親のやむを得ない就労に対応する消極的対応策であった。しかしながら、少

子化の直接的要因は女性の就労意欲の高まりと、それに連動する形での女性の晩婚化、非婚化の傾向であること⁽¹⁾、その背景に男女の固定的な役割分業観が依然として職場を支配していることが挙げられると認識されるようになってきた。そこから、少子化対策は固定的な性別役割分業観の是正と切り離せないと考えられるようになり、ここにおいて、保育サービスは、親(父母)の就労と子育てを両立させる普遍的サービスとして認識されるに至ったといえよう。さらに、近年の児童虐待問題への社会的関心の高まりが、専業主婦が働く母親よりも社会的に孤立しやすく子育て不安を抱えている、という問題を浮かび上がらせ、虐待の予防という観点からも、保育所が地域社会の子育て支援の拠点となることが期待されるようになってきている。しかしながら、こうした保育所を拠点とした子育て支援策が、職場を支配する男女の固定的な役割分業観の是正を直接もたらすものでないことも確かであって、そのためか、これまでの子育て支援策に拘わらず、女性の晩婚化、非婚化、したがって少子化傾向に歯止めがかかっていない現状である。このため、政府としても次世代育成支援対策推進法(平成15年)を制定、いっそうの子育て支援策の強化を目指して、地方公共団体および事業主に対し行動計画策定を義務づけるに至っている。

さて、福岡県立大学生涯福祉研究センターでは、田川地域における子育て支援のあり方を検討すべく社会福祉学、教育学、心理学等の学際的な研究プロジェクトを立ち上げ、調査研究を続けてきた。

第1回調査(古橋ら 1999)は、田川地域内に居住する4~7歳の子どもの保護者を対象としたもので、子育て意識および子育て支援サー

ビスへのニーズ調査であった。それはちょうど、地域内において子育て支援センターが開設され始めた時期に対応するものであった。第2回調査(古橋ら 2002)は、3歳までの子どもの保護者を対象に、乳幼児健診の機会を活用して実施した同趣旨の意識調査であった。これらから期待される子育て支援策として、経済的負担の軽減策、母親の身体的・時間的負担の軽減策、学童保育と児童館の充実、母子保健サービスへの期待、子育て支援センターの充実、緊急時の子育て代行システムの充実があると確認された。

第3回調査(古橋ら 2004)は、子育て支援サービスを提供する保育者側の子育て支援策についての意識調査であった。そこでは、子育て支援サービスの必要性を認識しながらも、そのことが「子どもの発達支援」につながっているか疑問を持っている保育者が少なくないこと、むしろ、親の育児能力形成につながるような支援策の必要を感じていることが明らかになった。また、地域の子育て相談を担うには「職員数や職員の専門性の不足」が認識されていることも明らかにされた。全体として多くの保育者が、親と子が共に地域で育ちあえるような地域づくりを望んでいることが確認できた。保育所の相談体制を強化しないままに、保育所を拠点とする子育て支援策を強調する現在の子育て支援策について、それを担う保育者の側から、課題や限界が指摘されたことになる。

ところで、日本の子育て支援策の課題として、さらに筆者らが指摘したいことは、現状は乳幼児の保護者に対する子育て支援策となっていて、生涯を通じた子育て支援策に必ずしもなっていない点である。社会環境の急激な変化ばかりでなく、少子化傾向そのものが、子育ての世代間継承や地域的な親育ち、子育てを困難にしてい

る以上、より意図的な子育ての世代間継承の福祉の枠組みを超えた取り組みこそが期待されるのではないだろうか。すなわち、兄弟が減ってきた現在、家庭の育ちの中で弟・妹としての、赤ちゃんに触れる機会もないままに大人になることが一躍化していると推定される。そのことが親になることへの不安あるいは親になったときの子育て不安に通じるのではないか。とするなら、それへの対応策こそが必要ではないか。より具体的には子どもの成長・発達に即した子育て体験の保証を可能にするような工夫が必要ではないかと考えた。さらに、男女の固定的な役割分業観が少子化の背景にあるとするなら、高校生はどのような結婚観や子育て観、男女役割分業観を抱いているかも見逃せない問題と考えた。

このため、今回筆者らは、田川地域の高校生を対象に、以下のことを主な目的として意識調査を実施することにした。すなわち、少子化傾向の中で子育て体験がいかに継承されているか否か、子育て体験の有無が赤ちゃんへのイメージ等に与える影響、学校における子育てに関する教育の実態や課題、性別役割分業意識の実態等を明らかにすることである。

方法

調査時期：2004年10月～11月下旬に調査票を配布し、回収した。

調査対象の選定と手続き：田川市郡の7つの高校（公立6校、私立1校）の各学年2クラスの生徒を対象とした（1校のみ、全生徒を対象とした）。当初調査票の配布及び回収方法は、学校で調査票と返信用封筒を配布し、生徒が自宅で記入し郵送する方法を計画していた。しかし、調査依頼の段階で、種々の状況等を考慮し、学

校で調査を実施し、調査票を回収してもらうことに方針を変えた場合が多かった。そこで回収方法は、自宅で記入し郵送する方法（2校）、学校で記入し回収する方法（5校）であった。調査票配布総数1669部のうち、回収した調査票は1519部で、回収率は91%であった（学校における回収率は100%、郵送による回収率は53%（170/320）であった）。

調査回答者：高校生1519名（男682名、女827名）（表1参照）。3年生が占める割合が低いのは、進学や就職活動のため3年生を除いて、調査を実施した学校があるためである。なお、パーセンテージはそれぞれ四捨五入しているため総計が100%にならないところもある。

調査項目：調査項目と内容は下記のとおりである。なお、調査票は論文末に添付する。

(1)調査回答者の属性：性別、学年、幼児期の保育歴、家族形態、就学前の弟・妹の有無についてたずねた。(2)子育て体験（4項目、4件法）、学校における子育て授業経験の有無とその形態（時期・回数・教科・授業形態）についてたずねた。(3)赤ちゃんへのイメージ（12項目、4件法）：原田（2002）による子ども観尺度を参考に、12項目を選択した。「関わりの楽しさ」「活発さ」「個別性」「有能性」「対応困難」「想像困難」の6つの下位概念を尺度化し、それぞれについてたずねた。(4)将来の理想の家族像：理想の結婚年齢、理想の家族形態、子どもを育てたいと思うか、理想の子どもの人数、子どもを育てたいと思わない理由についてたずねた。(5)子育てに関する性別役割意識：父親の生き方、母親の生き方、子育て中の父親・母親が特に大切にすべきこと、家事・育児をする男性・女性への好意度（各4項目、5件法）についてたずねた。(6)子育ての充実感・負担感尺度（8項目、

表1 調査回答者の学年と性別

性別	1年生		2年生		3年生		不明		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
男	230	(15.1)	231	(15.2)	219	(14.4)	2	(0.1)	682	(44.9)
女	301	(19.8)	311	(20.5)	213	(14.0)	2	(0.1)	827	(54.4)
不明	1	(0.1)	1	(0.1)	0	(0.0)	8	(0.5)	10	(0.7)
合計	532	(35.0)	543	(35.7)	432	(28.4)	12	(0.8)	1519	(100.0)

表2 学年・男女別の保育歴 (n=1491)

性別	保育歴	学年						合計	
		高校1年生	(%)	高校2年生	(%)	高校3年生	(%)	人数	(%)
男	自宅	1	(0.4)	4	(1.8)	2	(0.9)	7	(1.0)
	保育所(園)	147	(65.0)	160	(70.2)	149	(68.3)	456	(67.9)
	幼稚園	53	(23.5)	44	(19.3)	53	(24.3)	150	(22.3)
	保育所(園)と幼稚園	22	(9.7)	18	(7.9)	13	(6.0)	53	(7.9)
	その他	3	(1.3)	2	(0.9)	1	(0.5)	6	(0.9)
	合計	226	(100.0)	228	(100.0)	218	(100.0)	672	(100.0)
女	自宅	3	(1.0)	1	(0.3)	3	(1.4)	7	(0.9)
	保育所(園)	198	(66.7)	226	(72.9)	145	(68.4)	569	(69.5)
	幼稚園	69	(23.2)	62	(20.0)	48	(22.6)	179	(21.9)
	保育所(園)と幼稚園	24	(8.1)	18	(5.8)	15	(7.1)	57	(7.0)
	その他	3	(1.0)	3	(1.0)	1	(0.5)	7	(0.9)
	合計	297	(100.0)	310	(100.0)	212	(100.0)	819	(100.0)

5件法)：福丸・無藤・飯長(1999)による尺度を参考とした。「子どもを育てることはつらい仕事だと思う」「子どもを育てていると、自分の好きなことができないと思う」などの4項目で、子育ての負担感についてたずねた。「子どもを育てることは、素晴らしい仕事だと思う」「子どもを育てることによって、自分もまた成長できると思う」などの4項目で子育ての充実感についてたずねた。(7)少子化に対する意識：少子化への問題意識についてたずねた。

結果

(1) 調査回答者の属性

表2は学年・男女別に保育歴を示したものである。括弧内の割合は、それぞれの学年・男女別の各総数に対する割合である。保育所が約7割、幼稚園が約2割、双方に通所が約7%あり、

ほとんどの人が、保育所ないし幼稚園に通所していたことが確認できる。

表3は現在の家族形態を学年・男女別に示したものである。この表も括弧内の割合は、それぞれの学年・男女別の各総数に対する割合である。なおここでは、単親家族でも祖父母のどちらかと暮らしている場合には三世代家族としている。三世代家族、核家族、単親家族、その他に分けると、三世代家族が約3割、核家族が約5割、単親家族が約2割近くを占めることが分かった。核家族と離婚家族の増加の一方で、多世代家族が3割弱あることに注目したい。なおここで、その他とは兄家族との同居、叔母との同居等である。

表4は就学前の弟・妹がいる人の人数を学年・男女別に示したものである。分母にはそれぞれの学年・男女別の各総数を示している。括

表3 学年・男女別の現在の家族形態 (n=1453)

性別	学年	家族形態									
		三世大家族	(%)	核家族	(%)	単親家族	(%)	その他	(%)	合計	(%)
男	高校1年生	66	(28.7)	123	(53.5)	35	(15.2)	6	(2.6)	230	(100.0)
	高校2年生	70	(30.3)	113	(48.9)	42	(18.2)	6	(2.6)	231	(100.0)
	高校3年生	53	(24.3)	111	(50.9)	46	(21.1)	8	(3.7)	218	(100.0)
	合計	189	(27.8)	347	(51.1)	123	(18.1)	20	(3.0)	679	(100.0)
女	高校1年生	87	(29.0)	151	(50.3)	53	(17.7)	9	(3.0)	300	(100.0)
	高校2年生	79	(25.4)	173	(55.6)	55	(17.7)	4	(1.3)	311	(100.0)
	高校3年生	65	(30.5)	102	(47.9)	40	(18.8)	6	(2.8)	213	(100.0)
	合計	231	(28.0)	426	(51.7)	148	(18.0)	19	(2.3)	824	(100.0)

表4 学年・男女別の就学前の弟・妹がいる人の数 (n=1496)

性別	学年	高校1年生	(%)	高校2年生	(%)	高校3年生	(%)	合計	(%)
		男	20/228	(8.8)	24/230	(10.4)	14/217	(6.5)	58/675
女	30/299	(10.0)	23/309	(7.4)	11/213	(5.2)	64/821	(7.8)	
総計	50/527	(9.5)	47/539	(8.7)	25/430	(5.8)	122/1496	(8.2)	

表5 男女別の就学前の弟・妹の有無と子育て体験との関係 (n=1495)

子育て体験の内容	性別	就学前の弟・妹の有無				合計	(%)
		弟・妹有り	(%)	弟・妹無し	(%)		
赤ちゃんを抱いた経験がある	男	38/58	(65.5)	284/616	(46.1)	322/674	(47.8)
	女	49/65	(75.4)	453/757	(59.8)		
赤ちゃんにミルクを飲ませたことがある	男	20/58	(34.5)	93/615	(15.1)	113/673	(16.8)
	女	40/65	(61.5)	228/757	(30.1)		
小さな子どもの遊び相手をしたことがある	男	32/58	(55.2)	303/616	(49.2)	335/674	(49.7)
	女	46/65	(70.8)	496/756	(65.6)		
絵本を読んであげたことがある	男	15/58	(25.9)	83/615	(13.5)	98/673	(14.6)
	女	37/65	(56.9)	284/757	(37.5)		

弧内はその割合を示している。就学前の年齢が比較的離れた兄弟姉妹の有無について聞いたところ、高校1年生では9~10%がいると回答している。高校3年生になると約6%となっている。兄弟姉妹の減少が家庭内における子育て体験の継承を困難にしていると一般に指摘されるが、本調査でも兄弟姉妹の少なさがうかがえた。

(2) 子育て体験

表5は就学前の弟・妹の有無と子育て体験との関係を男女別に示している。分母にはそれぞれの男女別の各総数を示している。括弧内はその

割合を示している。子育ての体験について「赤ちゃんを抱いたこと」「赤ちゃんにミルクを飲ませたこと」「近所の小さな子どもの遊び相手をしたこと」「小さな子どもに絵本を読んであげたこと」について聞いた。いずれも女性の方が男性よりも経験頻度が高いこと、また就学前の弟・妹がいる場合には、そうではない場合よりも赤ちゃんと接する機会が多くなっていることが確認できた。しかしながら、性別にみると、就学前の弟・妹がいても、赤ちゃんにミルクを飲ませた経験については、男性は女性の半分近くの

割合しか経験していない。このことは親の子育ての中で、性別役割分業意識が子どもに伝えられていることだろう。

(3) 学校での子育て教育

表6は、子育てに関する授業経験を学年・男女別に示している。分母にはそれぞれの学年・男女別の各総数を示している。括弧内はその割合を示している。学校の授業等で子育てに関係する勉強をしたことが「ない(0回)」と回答したものが、男性で52%、女性で27%と、性別で大きな差があった。このことは、学校教育の在り方が、子育てに関わる性別役割分業観を助長していることだろう。授業の回数でも4回以上の経験者は、男性で22%、女性で45%と大差であった。

表7は高校3年生を対象とした子育てに関する勉強をした時期を男女別に示している。分母には男女別の子育てに関する勉強をしたことのある人の総数を示している。括弧内はその割合を示している。子育てに関する勉強をした時期としては中学3年、続いて高校2～3年に集中していることが分かる。

表8は子育てに関する勉強をした教科を男女別に示したものである。分母には男女別の子育てに関する勉強をしたことのある人の総数を示している。括弧内はその割合を示している。授業科目としては家庭科を挙げた人が6割前後を占め、続いて総合的学習の時間を挙げた人が約2割ある。男女別に見ると、ホームルームを挙げた人は女性で2.7%であったのに対し男性で

表6 学年・男女別の子育てに関する授業経験 (n=1487)

子育てに関する 授業経験	性別	学年						合計	
		高校1年生	(%)	高校2年生	(%)	高校3年生	(%)		(%)
なし	男	128/224	(57.1)	117/230	(50.9)	106/216	(49.1)	351/670	(52.4)
	女	83/297	(37.7)	76/307	(35.5)	56/213	(34.8)	215/817	(26.6)
1回	男	15/224	(6.7)	19/230	(8.3)	20/216	(9.3)	54/670	(8.1)
	女	21/297	(9.6)	21/307	(9.8)	16/213	(9.9)	58/817	(7.2)
2回	男	26/224	(11.6)	19/230	(8.3)	19/216	(8.8)	64/670	(9.6)
	女	32/297	(14.6)	26/307	(12.2)	15/213	(9.3)	73/817	(9.0)
3回	男	13/224	(5.8)	17/230	(7.4)	21/216	(9.7)	51/670	(7.6)
	女	42/297	(19.1)	33/307	(15.4)	24/213	(14.9)	99/817	(12.3)
4回以上	男	42/224	(18.8)	58/230	(25.2)	50/216	(23.2)	150/670	(22.4)
	女	116/297	(52.7)	147/307	(68.7)	100/213	(62.1)	363/817	(44.9)

表7 男女別の子育てに関する勉強をした時期(複数回答可)(高校3年生 n=266)

性別	中学1年生 (%)	中学2年生 (%)	中学3年生 (%)	高校1年生 (%)	高校2年生 (%)	高校3年生 (%)	その他 (%)
男	12/109 (11.0)	26/109 (23.9)	64/109 (58.7)	20/109 (18.4)	29/109 (32.6)	41/109 (37.6)	2/109 (1.8)
女	16/156 (10.2)	35/157 (22.3)	82/157 (52.2)	54/157 (34.4)	60/157 (38.2)	44/157 (28.0)	5/156 (3.2)

表8 男女別の子育てに関する勉強をした教科(複数回答可)(n=922)

性別	家庭科 (%)	社会科 (%)	公民 (%)	進路選択の 授業 (%)	ホーム ルーム (%)	総合的学習 の時間 (%)	その他 (%)
男	236/318 (60.1)	2/318 (0.5)	4/318 (1.0)	15/318 (3.8)	28/318 (7.1)	79/318 (20.1)	29/318 (7.4)
女	461/603 (56.8)	4/604 (0.5)	8/604 (1.0)	48/604 (5.9)	22/604 (2.7)	190/602 (23.4)	78/604 (9.6)

表9 男女別の学校教育における子育てに関する授業の形態 (n=920)

性別	形態	教科書や先生の 話やビデオ	(%)	実際に子どもを 見る体験授業	(%)	実際に子どもと 遊ぶ体験授業	(%)	学校でのボラ ンティア活動	(%)	その他	(%)
男		221/318	(69.5)	37/318	(11.6)	149/318	(46.9)	17/318	(5.3)	9/318	(2.8)
女		460/602	(76.4)	110/602	(18.3)	347/601	(57.7)	31/602	(5.1)	31/602	(5.1)

7.1%であったことが注目できる。

表9は学校教育における子育てに関する授業の形態を男女別に示したものである。分母には男女別の子育てに関する勉強をしたことのある人の総数を示している。括弧内はその割合を示している。「実際に子どもと遊ぶ体験授業」は35%と、体験学習が重視されるようになってきていることがうかがえる。しかしながら、保育所や幼稚園に行つて、赤ちゃんや子どもと直接接する機会がたとえ1~2度あったとしても、子育て体験の機会保証としては不十分であろう。継続性が期待できるボランティア経験については、5%にとどまることが確認できた。

表10は学校教育における子育てに関する授業経験の有無と子育て体験との関係を男女別に示したものである。分母には男女別の総数を示している。括弧内はその割合を示している。家庭において就学前の弟・妹がいるか否かが、子育て体験に大きく影響していることは表5において確認した。しかしながら少子化の中では、学

校教育における子育て教育が、子育て体験の保証に通じることが社会的に期待されると考える。そこで、学校での子育て教育と子育て体験との関係をみることにした。その結果、女性ではいずれの項目でも、学校での子育て教育が子育て体験の機会の増加につながっていることが確認できた。これに対し、男性については大差がなかった。男性においては、学校における子育て教育は、直ちに子育て体験の保証につながっていないことが確認された。

全体として、学校教育は知識教育としては、あるいは形式的には男女平等的に展開されていると考えられるが、子育て教育としては、性別役割分業観の改善にはつながっていないことが確認された。しかしながら、男性の48%が家庭科や総合学習の時間を通じて子育てに関する授業を受けていることもまた事実であつて、男女区別なく家庭科を履修させるなど、学校教育を通じて固定的な性別役割分業観の改善を図ろうとしている学校側の姿勢も一部うかがえた。

表10 学校教育における子育てに関する授業経験の有無別の子育て体験 (n=1490)

子育て体験の内容	性別	授業あり	(%)	授業なし	(%)	合計	(%)
赤ちゃんを抱いた経験がある	男	159/320	(49.7)	163/351	(46.4)	322/671	(48.0)
	女	390/603	(64.7)	112/216	(51.9)	502/819	(61.3)
赤ちゃんにミルクを飲ませたことがある	男	52/320	(16.3)	57/350	(16.3)	113/670	(16.9)
	女	218/603	(36.2)	47/216	(21.8)	265/819	(32.4)
小さな子どもの遊び相手をしたことがある	男	169/320	(52.8)	166/351	(47.3)	335/671	(49.9)
	女	422/602	(70.1)	118/216	(54.6)	540/818	(66.0)
絵本を読んであげたことがある	男	57/320	(17.8)	42/350	(12.0)	99/670	(14.8)
	女	265/603	(43.9)	54/216	(25.0)	319/819	(38.9)

(4) 子育て体験の有無と赤ちゃんへのイメージとの関係

表11は、赤ちゃんへのイメージについての6下位尺度の内的一貫性の指標 (chronbach の α 係数) を示したものである。「個別性」については、 α 係数が低いため ($\alpha = .50$)、下位尺度を構成することは妥当でないと判断し、「赤ちゃんは、一人一人違う」を「個性」、「子どもは、0～5歳児まで幅がある」を「年齢による幅」として扱うことにした。また、それ以外の下位尺度については、「有能性」は、.64と若干低いものの、.72～.89と高い値を示しており、以後の分析で下位尺度として用いても差し支えないことが示されたといえる。

表12は男女別の赤ちゃんへのイメージ尺度得点の記述統計量を示したものである。また図1はそれを棒グラフで示したものである。子育て体験 (赤ちゃんを抱いた経験) の頻度によって、赤ちゃんへの肯定的・否定的イメージの得点に差があるかどうかを検討するために、分散分析を行った。表13に子育て体験頻度別の赤ちゃんへのイメージ得点の記述統計量、表14に分散分

表11 各下位尺度の Chronbach の α 係数 ($n = 1491$)

下位尺度名 項目番号	α 係数
関わりの楽しさ 1,2	.89
活発さ 3,4	.72
個別性 5,6	.50
有能性 7,8	.64
対応困難 9,10	.76
想像困難 11,12	.77

析表を示した。子育て体験の頻度を独立変数、赤ちゃんへのイメージ得点を従属変数とした一元配置の分散分析を行ったところ、「対応困難」以外の尺度で、赤ちゃんを抱いた経験頻度の主効果が有意であった (「関わりの楽しさ」 ($F(3, 1484) = 85.03, p < .01$), 「活発さ」 ($F(3, 1476) = 32.57, p < .01$), 「有能性」 ($F(3, 1475) = 24.76, p < .01$), 「想像困難」 ($F(3, 1462) = 171.59, p < .01$), 「個性」 ($F(3, 1483) = 19.69, p < .01$), 「年齢による幅」 ($F(3, 1470) = 12.52, p < .01$))。また主効果が有意であったので、LSD法による多重比較を行ったところ、表14に示すように、経験頻度が高いほど、肯定的なイメージの得点は高くなり、否定的なイメージの得点は低くなっている。このことより、子育て体験が多い人ほど、赤ちゃんに対するイメージが肯定的であることが示された。

(5) 理想的な家族像

表15は理想の結婚年齢を男女別に示したものである。男女とも20～24歳を挙げるものが一番

表12 男女別の赤ちゃんへのイメージ尺度得点の記述統計量 ($n = 1469$)

下位尺度名	性別	M	SD	n
関わりの楽しさ	男	3.26	.82	670
	女	3.62	.63	818
活発さ	男	3.51	.64	662
	女	3.65	.53	814
有能性	男	2.95	.80	665
	女	3.17	.69	810
対応困難	男	3.12	.85	664
	女	3.02	.81	806
想像困難	男	1.65	.83	659
	女	1.42	.65	804
個性	男	3.63	.68	666
	女	3.79	.49	817
年齢による幅	男	3.16	.85	661
	女	3.36	.74	810

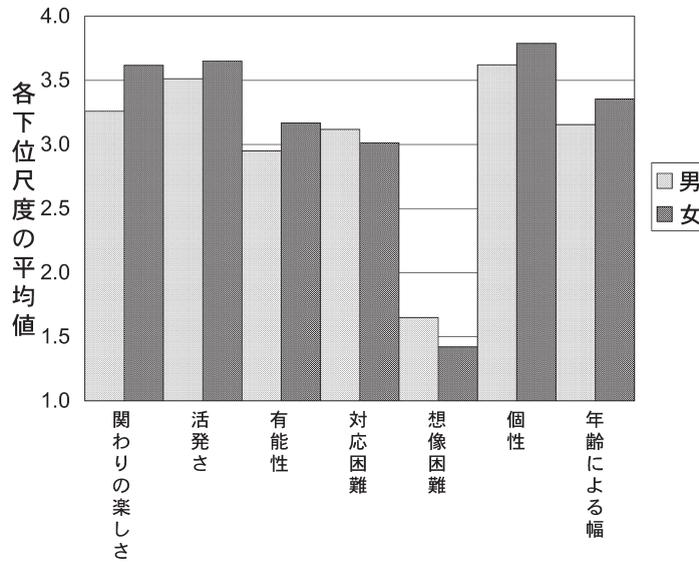


図1 男女別の赤ちゃんへのイメージ得点の平均値

表13 赤ちゃんを抱いた経験頻度別の赤ちゃんへのイメージ得点の記述統計量

赤ちゃんへのイメージ尺度	赤ちゃんを抱いた経験頻度	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
関わり楽しさ	ぜんぜんなかった	203	5.79	2.00
	あまりなかった	461	6.69	1.39
	わりとあった	494	7.11	1.27
	しょっちゅうあった	330	7.65	0.91
活発さ	ぜんぜんなかった	201	6.61	1.67
	あまりなかった	458	7.07	1.13
	わりとあった	493	7.27	0.98
	しょっちゅうあった	328	7.57	0.91
有能性	ぜんぜんなかった	202	5.54	1.74
	あまりなかった	461	5.96	1.50
	わりとあった	492	6.29	1.36
	しょっちゅうあった	324	6.57	1.40
対応困難	ぜんぜんなかった	202	6.18	1.65
	あまりなかった	457	6.16	1.56
	わりとあった	490	6.16	1.66
	しょっちゅうあった	325	5.95	1.84
想像困難	ぜんぜんなかった	202	4.51	1.93
	あまりなかった	456	3.49	1.39
	わりとあった	485	2.56	1.01
	しょっちゅうあった	323	2.25	0.90
個性	ぜんぜんなかった	203	3.47	0.85
	あまりなかった	460	3.72	0.56
	わりとあった	494	3.72	0.55
	しょっちゅうあった	330	3.87	0.45
年齢による幅がある	ぜんぜんなかった	200	3.09	0.95
	あまりなかった	460	3.16	0.77
	わりとあった	488	3.34	0.76
	しょっちゅうあった	326	3.43	0.76

表14 赤ちゃんを抱いた経験頻度別による赤ちゃんへのイメージ得点の分散分析結果

下位尺度名		SS	df	MS	F 値	p	多重比較 (5%水準)
関わりの楽しさ	グループ間	475.9	3	158.6	85.03	**	1<2<3<4
	グループ内	2768.4	1484	1.9			
	合計	3244.3	1487				
活発さ	グループ間	124.2	3	41.4	32.57	**	1<2<3<4
	グループ内	1875.6	1476	1.3			
	合計	1999.8	1479				
有能性	グループ間	78.6	3	26.2	24.76	**	1<2<3<4
	グループ内	1859.1	1475	1.3			
	合計	1937.7	1478				
対応困難	グループ間	159.9	3	53.3	1.40		
	グループ内	3174.7	1470	2.2			
	合計	3334.6	1473				
想像困難	グループ間	11.7	3	3.9	171.59	**	4<3<2<1
	グループ内	4087.0	1462	2.8			
	合計	4098.7	1465				
個性	グループ間	841.1	3	280.4	19.69	**	1<2・3<4
	グループ内	2388.9	1483	1.6			
	合計	3230.1	1486				
年齢による幅がある	グループ間	20.0	3	6.7	12.52	**	1・2<3・4
	グループ内	501.8	1470	0.3			
	合計	521.8	1473				

※ ** $p < .01$

※ 1: ぜんぜんなかった 2: あまりなかった 3: わりとあった 4: しょっちゅうあった

表15 男女別の理想の結婚年齢 (n=1500)

性別	結婚年齢	20歳未満 (%)	20~24歳 (%)	25~29歳 (%)	30~34歳 (%)	35~39歳 (%)	40歳以上 (%)	その他 (%)	考えていない (%)	合計
男	27	(4.0)	384 (56.9)	157 (23.3)	15 (2.2)	0 (0.0)	2 (0.3)	12 (1.8)	78 (11.6)	677
女	58	(7.1)	544 (66.3)	141 (17.2)	7 (0.9)	1 (0.1)	1 (0.1)	9 (1.1)	60 (7.3)	823

多くなっている。少子化の直接的要因が、女性の晩婚化、非婚化の傾向にあるといわれるが、本調査で見ると、そうした傾向は確認されなかった。男性の場合、結婚を考えていない人が1割以上あった。また、現実観がないと考えられる。

表16は理想の家族形態を男女別に示したものである。理想の家族形態として三世代家族を挙げる人は男女とも8%にとどまっている。夫婦と子どもからなる核家族を理想の家族形態とする人が、男性で約7割、女性で約8割であった。

男性では「ひとり暮らし」を挙げる人が1割あった。

(6) 子育て意識

表17は子育て意識を男女別に示したものである。男性では7割、女性では8割の人が子どもを育てたいと考えている。一方で、「わからない」と答えている人が男性では2割、女性では1割いることに注目しておきたい。性別役割分業意識が影響している可能性を考えるからである。

また表18では子どもがほしいと思わない人に関して、男女別にその理由を示している。男性

表16 男女別の理想の家族形態 (n=1499)

性別	家族形態	ひとり暮らし (%)	夫妻 (%)	夫妻とどちらかの親 (%)	夫妻と子ども (%)	夫妻と子どもと祖父母 (%)	その他 (%)	合計
男		73 (10.8)	35 (5.2)	6 (0.9)	492 (72.9)	56 (8.3)	13 (1.9)	677
女		41 (5.0)	43 (5.2)	7 (0.9)	652 (79.5)	66 (8.0)	11 (1.3)	822

表17 男女別の子育て意識 (n=1489)

性別	子育て意識	子どもを育てたいと思う (%)	子どもを育てたいと思わない (%)	わからない (%)	総計
男		489 (73.1)	43 (6.4)	137 (20.5)	669
女		671 (81.8)	59 (7.2)	90 (11.0)	820

では、「子どもが嫌いだから」が29%、続いて「育児の心理的肉体的負担」が22%をしめている。一方女性では、「出産や育児への自信欠如」が36%、続いて「育児の心理的肉体的負担」が23%であった。この男女の違いには、性別役割分業意識が反映されているように思われる。

表19には理想とする子どもの人数を男女別に示した。男女ともに、2人が6割、3人が3割弱であった。これは成人を対象とした調査に比べると3人の割合が少なく、2人が多い結果である⁽²⁾。

(7) 子育てに関する性別役割意識

表20、21は乳幼児をもつ父親・母親の生き方についての考えを男女別に示したものである。ここでは、子育てに関してどのような性別役割意識を抱いているのかを確認しようとした。男女とも、乳幼児を持つ父親は子育てと仕事を両立させるべきだと、8~9割の人が考えている。一方、乳幼児を持つ母親は仕事より子育てを優先させるべきだと考える男性は53%、女性は47%で半数を占めていた。このことは、男女とも、性別役割分業観をかなり取り込んでいるこ

表18 男女別の子どもがほしいと思わない理由 (n=106)

子どもがほしいと思わない理由	男 (%)	女 (%)	合計 (%)
子どもが嫌いだから	13 (28.9)	11 (18.0)	24 (22.6)
育児の心理的肉体的負担	10 (22.2)	14 (23.0)	24 (22.6)
出産や育児への自信欠如	7 (15.6)	22 (36.1)	29 (27.4)
子育てよりも仕事優先	2 (4.4)	6 (9.8)	8 (7.6)
子育てよりも趣味優先	5 (11.1)	4 (6.6)	9 (8.5)
子育ての経済的負担	1 (2.2)	0 (0.0)	1 (0.9)
未来に希望がもてない	7 (15.6)	4 (6.6)	11 (10.4)
総計	45 (100.0)	61 (100.0)	106 (100.0)

表19 男女別の理想とする子どもの人数 (n=1160)

性別	人数	1人 (%)	2人 (%)	3人 (%)	4人以上 (%)	総計 (%)
男		38 (7.8)	301 (61.7)	132 (27.1)	17 (3.5)	488 (100.0)
女		31 (4.6)	418 (62.3)	193 (28.8)	29 (4.3)	671 (100.0)

表20 男女別の乳幼児をもつ父親の生き方について共感する考え方 (n=1493)

性別	考え方	子育てより 仕事優先	(%)	仕事と子育ての 両立	(%)	仕事より 子育て優先	(%)	総計
男		57	(8.5)	582	(86.5)	34	(5.1)	673
女		51	(6.2)	744	(90.7)	25	(3.1)	820
合計		108	(7.2)	1326	(88.8)	59	(4.0)	1493

表21 男女別の乳幼児をもつ母親の生き方について共感する考え方 (n=1486)

性別	考え方	子育てより 仕事優先	(%)	仕事と子育ての 両立	(%)	仕事より 子育て優先	(%)	総計
男		17	(2.6)	295	(44.3)	354	(53.2)	666
女		6	(0.7)	431	(52.6)	383	(46.7)	820
合計		23	(1.6)	726	(48.9)	737	(49.6)	1486

とを示している。しかしながら、母親は仕事と子育ての両立を図るべきと考える女性は男性より多くなっている点に注目したい。女性の就労意欲に対し、男性側が十分な理解を示していないように見える。

次に、表22と23は父親・母親の特に大切にすべきことを男女別に示したものであるが、男女とも7～9割は、父親であれば、母親であれば、特に大切にすべきことは「仕事」ではなく「子どもと関わること」を挙げている。父親は仕事を最も大切にすべきとの考え方は男女とも1割前

後を占める。母親は家事を最も大切にすべきと考える男性は10%、女性は6%と男女で違いがでている。男性は女性に対し家事の負担をより多く引き受けることを期待していることがうかがえる。

また表24、25は家事・育児をする男性・女性に対する好意度を男女別に示したものである。男女とも得点が非常に高く、家事・育児をする男性・女性に対する好意度が高いことが示された。仕事より家庭を大事にするのは、女性に対しては好ましいと考える人が男女とも多い一方、

表22 男女別の父親の特に大切にすべきこと (n=1480)

性別	大切にすべきこと	子どもと関わること	(%)	仕事をする	(%)	趣味や教養の向上	(%)	地域活動ボランティア	(%)	家事	(%)	その他	(%)	総計
男		482	(72.5)	79	(11.9)	42	(6.3)	14	(2.1)	36	(5.4)	12	(1.8)	665
女		672	(82.5)	66	(8.1)	10	(1.2)	20	(2.5)	38	(4.7)	9	(1.1)	815

表23 男女別の母親の特に大切にすべきこと (n=1468)

性別	大切にすべきこと	子どもと関わること	(%)	仕事をする	(%)	趣味や教養の向上	(%)	地域活動ボランティア	(%)	家事	(%)	その他	(%)	総計
男		500	(76.5)	12	(1.8)	35	(5.4)	29	(4.4)	68	(10.4)	10	(1.5)	654
女		692	(85.0)	8	(1.0)	26	(3.2)	33	(4.1)	46	(5.7)	9	(1.1)	814

表24 男女別の家事・育児をする男性に対する好意度 (n=1489)

性別	家事の内容	料理をする男の人		仕事より家庭を大事にする男の人		掃除や洗濯をする男の人		子どもの面倒をみる男の人	
		M	SD	M	SD	M	SD	SD	SD
男		4.53	(0.77)	4.08	(0.93)	4.22	(0.95)	4.61	(0.69)
女		4.81	(0.48)	4.27	(0.80)	4.52	(0.75)	4.88	(0.35)

表25 男女別の家事・育児をする女性に対する好意度 (n=1483)

性別	家事の内容	料理をする女の人		仕事より家庭を大事にする女の人		掃除や洗濯をする女の人		子どもの面倒をみる女の人	
		M	SD	M	SD	M	SD	SD	SD
男		4.61	(0.69)	4.84	(0.48)	4.57	(0.73)	4.76	(0.57)
女		4.81	(0.35)	4.94	(0.29)	4.59	(0.66)	4.89	(0.36)

男性に対しては好ましいと考える人が男女ともそれほど多くなかった。なお、表にはしなかったが、学校での子育て教育経験の有無は、性別役割分業意識にあまり影響を与えていないことを確認した。

(8) 子育てへの充実感・負担感

表26は子育てへの充実感・負担感尺度得点の記述統計量を男女別に示したものである。各下位尺度のChronbachの α 係数は、充実感尺度では、.88、負担感尺度では.74であった。内的一貫性が確認されたといえる。図2は各尺度の平均値を棒グラフにしたものである。

表27は赤ちゃんを抱いた経験頻度別による子育てへの充実感と負担感の記述統計量を示したものである。また、赤ちゃんを抱いた経験頻度(4水準)を独立変数、子育てへの充実感・負担感を従属変数とした一元配置の分散分析をした。表28に分散分析の結果を示した。分散分析の結果、「子育てへの充実感」「子育てへの負担感」とともに、赤ちゃんを抱いた経験の主効果が有意であった(「充実感」($F(3, 1473) = 32.94, p < .01$)、「負担感」($F(3, 1476) = 16.91, p < .01$)。また主効果が有意であったので、LSD

表26 男女別の子育てへの充実感・負担感 (有効回答数 n=1476)

下位尺度名	性	M	SD	n
子育てへの充実感 ($\alpha = .88$)	男	17.04	(3.13)	660
	女	17.81	(2.79)	813
子育てへの負担感 ($\alpha = .74$)	男	11.76	(3.58)	663
	女	11.37	(3.29)	813

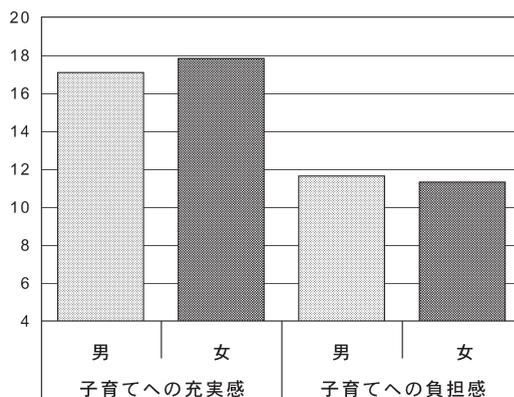


図2 男女別の子育てへの充実感・負担感

表27 赤ちゃんを抱いた経験頻度別による子育てへの充実感・負担感の記述統計量

下位尺度名	赤ちゃんを抱いた 経験頻度	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
子育てへの 充実感	ぜんぜんなかった	201	16.00	3.69
	あまりなかった	461	17.20	2.94
	わりとあった	493	17.66	2.62
	しょっちゅうあった	322	18.49	2.58
子育てへの 負担感	ぜんぜんなかった	204	12.27	3.51
	あまりなかった	461	11.97	3.16
	わりとあった	495	11.52	3.39
	しょっちゅうあった	320	10.45	3.54

表28 赤ちゃんを抱いた経験頻度別による子育てへの充実感・負担感得点の分散分析結果

下位尺度名		SS	df	MS	F 値	<i>p</i>	多重比較 (5%水準)
子育てへの 充実感	グループ間	818.6	3	272.9	32.94	**	1<2<3<4
	グループ内	12201.5	1473	8.3			
	合計	13020.1	1476				
子育てへの 負担感	グループ間	576.7	3	192.2	16.91	**	4<3<2・1
	グループ内	16775.7	1476	11.4			
	合計	17352.4	1479				

** *p* < .05

1: ぜんぜんなかった 2: あまりなかった 3: わりとあった 4: しょっちゅうあった

法による多重比較を行ったところ、充実感に関しては、赤ちゃんを抱いた経験の頻度があがるほど、充実感の得点が高くなっていった。一方で負担感に関しては、赤ちゃんを抱いた経験の頻度があがるほど、負担感の得点が低下していった。このことより、子育て体験は、子育ての充実感・負担感に影響を与えていることが示唆された。

(9) 少子化についての問題意識

表29は少子化についての問題意識を男女別に示したものである。男女ともに6割が深刻な問

題であると捉えている。また男性では16%があまり心配することではないと考えている。そして男女ともに2割の人があまり考えていないというところも注目すべき点である。厚生労働省が発表した人口動態統計(概数)によると、2003年の一人の女性が生涯に産む子どもの数(合計特殊出生率)は、1.29人である。国民の8割近くが少子化を深刻な問題として捉え、何らかの対策を望む人が9割強に達するなど、少子化の急速な進行を厳しく受け止めている国民が圧倒

表29 男女別の少子化についての問題意識 (n=1477)

性別	少子化への問題意識	深刻な問題だと思う		あまり心配することではないと思う		望ましいことだと思う		あまり考えていない	
		度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
男		401	(60.4)	107	(16.1)	9	(1.4)	147	(22.1)
女		554	(68.1)	78	(9.6)	6	(0.7)	175	(21.5)
計		955	(64.7)	185	(12.5)	15	(1.0)	322	(21.8)

的多数を占めるなかで⁽³⁾、高校生にとっては深刻な問題としてはそれほど捉えられていないことが示された。

考察

以下6つの観点から本調査結果を考察することにした。

第1点は、子育て体験の世代間継承の問題である。まず、子育て体験についてであるが、「赤ちゃんを抱いた経験」のある人は、男性の約半数、女性の約6割と意外に高い割合であり、かつ、男女の差も大きくなかった。しかしながら、これに比べ、「赤ちゃんにミルクを飲ませたこと」のある人は、男性で17%にとどまり、女性でも33%にとどまっており、また、男女の間で大きな差があった。実質的な意味での継続的な子育て体験者の割合はさほど高くなく、とくに性別役割分業観が体験的レベルで親から子へと伝えられていることを示す結果になったといえよう。

次に、就学前の弟・妹がいるか否かが、子育て体験に与える影響は、当初の予想通り、かなり顕著であった。とくに、「赤ちゃんにミルクを飲ませたこと」のある人は、男性の場合、就学前の弟・妹がいない場合15%に対し、いる場合35%と倍以上の体験率であった。女性の場合、いない場合30%に対し、いる場合62%とやはり体験率は倍増している。実質的で継続的な子育て体験は、比較的年の離れた年少の兄弟姉妹の有無に大きく影響されることが改めて確認できた。言い換えるなら、少子化傾向ないし兄弟数の減少傾向が、子育て体験の減少につながり、子育ての世代間継承を困難にしていることを裏付ける結果となった。

第2点は、学校における子育て教育の現状と

課題である。子育てに関する授業経験で「なし」と回答した男性は52%、女性は27%であった。「ある」場合では、4回以上と回答する人が最も多く、両極化の傾向が認められた。子育てに関する授業経験の時期では、中学3年の時期を挙げる者が最も多く、続いて高校2～3年となっている。教科目としては、家庭科が中心で、続いて総合学習の時間が多く挙げられていた。また、授業の形態として「実際に子どもと遊ぶ体験授業」を挙げる人が5割前後と多かった。平成14年度より総合学習を通じた体験学習が導入されているが、その中で、子育て体験授業が行われていることが推定できる。ここで課題と思われることは、学校での子育て教育が、子育て体験に直接つながっているかどうかである。「赤ちゃんを抱いた経験」や「赤ちゃんにミルクを飲ませたことがある」の項目では、男性の場合、学校で子育てに関する授業経験者と未経験者との間でまったくといってよいほど違いは認められなかった。女性については、明らかな違いが認められた。

全体として、学校での取り組みにおいて、学校間で違いがあることが推定された。子育てに関する授業経験者は男女で大きな差があった。それは、家庭科の履修を男性にも義務づけているか否かの違いによると推定した。また、男性の場合、子育てに関する授業経験が実際的な子育て体験に通じていないことが確認できた。すなわち、学校における子育て教育は性別役割分業意識の改善につながっているとはいえないことが確認された。

第3点は、高校生の赤ちゃんへのイメージ、子育て観と子育て体験がそれらに与える影響である。高校生の赤ちゃんへのイメージは全体として「関わりの楽しさ」「活発さ」「個性的」と

いう肯定的イメージであった。しかし、男女差が認められた。肯定的イメージ項目では、女性が男性を上回っており、「対応困難」「想像困難」では逆に男性が女性を上回った。

子育て体験の有無が、赤ちゃんへのイメージ等に影響を与えていることが推定される結果であった。そこで、「赤ちゃんを抱いた経験」の有無が赤ちゃんへのイメージに与える影響を検討すると、明らかな相関性を確認することができた。さらに、子育て体験が、子育ての充実感・負担感に影響を与えていることもうかがえた。

第4点は、高校生の理想の家庭像・子育て観についてである。ほとんどの高校生が、20歳代で結婚し、子どもを育てたい、理想の子ども数は2～3人、と回答しており、理想の家族形態を核家族と回答している。原家族の形態として多世代家族は3割近くを占めるが、理想の家族形態としては男女とも8%にとどまった。核家族への志向が顕著である。

ところで、結婚観、子育て観について男女を比較すると、男性で「結婚を考えていない」が12%（女性7%）、「子どもを育てたいかわからない」が21%（女性11%）といずれも女性を上回っている。男性が性別役割分業観に支配され、家族を扶養するのが男性の責任であるとの意識から、結婚への不安、子育てへの不安を暗に感じているのかもしれない。子育て費用を社会的に負担しようとしていない日本の社会保障制度は少子化の大きな背景であることは、多くの子育て意識調査において、子育て不安として経済的負担が決まって第一に挙げられていることから明らかである。

「子どもがほしいと思わない」男性は6.4%、女性は7.2%と、ここでは女性が男性を上回っている。その理由として男性では「子どもが嫌い

だから」を挙げる者が最も多く、女性では「出産や育児へ自信欠如」を挙げるものが最も多くなっている。子育ては母親の責任であるとする性別役割分業観に女性が捕らえられていること、学校での子育て教育の取組みもその改善につながっていないことが背景にあるといえないだろうか。

第5点は、高校生の性別役割分業意識である。乳幼児をもつ母親の生き方で「仕事より子育てを優先すべきだ」という考え方に共感する男性は53%であるのに対し、女性は47%であった。日本の女性の労働力率はM字型を描く、すなわち、多くの仕事をもつ女性が、結婚・出産ともなって退職し、子育てに専念、子どもが手を放れて再就職するというパターンがある。このことが性別役割分業観を社会的に再生産することになり、少子化の大きな要因になっていると考える。ところが今回の調査結果から、大半の高校生が、男女とも母親は「仕事より子育てを優先すべき」という性別役割分業観を抱えていることが改めて再確認される結果となった。

第6点は、高校生の少子化への問題意識である。「深刻な問題だと思う」は、男性の60%、女性の68%とさほど高くなかった。逆に「あまり考えていない」が男女とも2割を超えている。少子化が社会問題視される場合、年金等の社会保障制度の見直しが迫られること、社会の活力が低下すること等が理由として挙げられることが多い。また、高齢者が社会の多数派を占めることから、その利益が政治的に優先されがちとなり、高齢者福祉対策に比し子育て支援等の児童福祉対策が軽視されがちになることが問題視されもする。しかしそれも結局高齢者の年金を支える次世代育成につながると思われるからである。こうした大人の論理に対し、高校生は

暗に不信感を抱き、少子化問題へ距離感をもつのかもしれない。

筆者らは、少子化問題を、日本の社会システムの歪みの顕在化として捉え、それ故、少子化問題への危機意識が日本の歪んだ社会システムの改善への大きな契機となる、という観点を重視したいと考えている。例えば、少子化への危機意識は、保育サービスを普遍的なサービスへと押し上げたのであり、社会福祉サービスの市民権化への一つの大きな契機となったと考える。同様に、少子化の背景に性別役割分業観を再生産する社会システムがあるとするなら、それに対する危機意識を契機として、歪んだ社会システムが改善されていく可能性がある。ところが、今回の調査結果は、家庭において性別役割分業意識が代代的に継承されており、学校における子育て教育においても男性の場合、子育て体験の保証につながっていないことが確認された。そのため高校生自身も性別役割分業観に捕らえられており、その結果として少子化問題への危機意識も希薄となっていると考える。

まとめ

改めて以下結論を要約したい。少子化対策として性別役割分業観の改善が強調されてはいるものの、性別役割分業観が代代的に継承されている実態が今回の調査結果から明らかになった。ほとんどの高校生が子どもを育てたいと思っているものの、「子どもがほしいと思わない」「わからない」との回答の背景に、性別役割分業観が影響していることがうかがえた。また、少子化傾向が、子育て体験の代代的継承を困難にしていること、子育て体験の有無が、赤ちゃんへのイメージや子育てへの肯定的なイメージに影響を与えていることが今回の調査結果から明ら

かになった。子育て不安への対応、したがって子育てへの相談支援が、深刻視される児童虐待の予防の観点からも強調されているが、子どもが生まれて親となった大人への対応策だけではなく、親となる以前の段階での子どもの成長・発達に即した子育て体験の保証こそが、子育て不安への有効な対応策であることを示唆する結果となったといえよう。学校において体験型の総合学習が展開されるようになってきているが、子育て体験学習をさらに性別役割分業意識の改善を図る方向性において充実させていくことが社会的に期待されるといえよう。

今回の調査では、田川地域の高校の先生方の全面的な協力を得ることができた。記して感謝したい。

注

- (1) 阿藤 (1982) によると1970年代の出生率の低下は有配偶者の低下によるという分析結果を示している。また、岩澤 (2002) によると反事実的コーホート出生率シミュレーションモデルを用いて最近の少子化傾向の約7割は結婚行動（非婚化および晩婚化）によるもので、残りの約3割がそれと独立な出生行動に基づく結論している。
- (2) 『平成16年版少子化社会白書』によると、2002（平成14）年では、理想の子ども数は2.56人であり、平均出生児数は2.23人であった。
- (3) 読売新聞世論調査 2000年1月29日

参考文献

- 阿藤誠 1982 わが国最近の出生率低下の分析, 人口問題研究, 5, 17-24.
岩澤美帆 2002 近年の期間 TFR 変動におけ

- る結婚行動および夫婦の出生行動の変化の寄与について 人口問題研究, 58(3), 15-44.
- 原田博子 2002 幼児教育科短大生の子ども観—高校生との比較— 筑紫女学園短期大学紀要, 37, 97-114.
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連 発達心理学研究, 10, 189-198.
- 古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ 1999 田川地域における子育て意識調査 福岡県立大学紀要, 8,(1), 113-134
- 古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ 2002 田川地域における子育て意識調査II 福岡県立大学紀要, 10,(2),97-118
- 古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ・本多潤子 2004 田川地域における保育者の子育て意識調査 福岡県立大学紀要,12,(2),55-74.
- ベネッセ教育総研 1991 モノグラフ 高校生 vol.32 親（おや）性
(http://www.crn.or.jp/cgi-bin/LIBRARY/disp_mokuji.pl?&sassi=M8&vol=32)
- 松永しのぶ・坪井寿子・田中菜緒子・伊東嘉奈子 2002 保育実習が学生の子ども観、保育士観に及ぼす影響 鎌倉女子大学紀要, 9, 23-33.

高校生の子育てについての意識調査

I	あなたご自身のことについておたずねします。あてはまる番号を、 <u>1つだけ</u> 選んで、○をつけてください。
---	---

問1 あなたの性別を教えてください。 1. 男 2. 女

問2 あなたの学年を教えてください。
1. 高校1年生 2. 高校2年生 3. 高校3年生

問3 あなたは、小学校に入る前、幼稚園や保育園(あるいは保育園)に行きましたか。

- | |
|---------------------------------------|
| 1. どちらにも行かずに、自宅(在宅)で両親、または祖父母等から育てられた |
| 2. 保育所(園)に行った |
| 3. 幼稚園に行った |
| 4. 保育所(園)と幼稚園に行っていた |
| 5. 保育所(園)や幼稚園以外の子どもを預かってもらえる所に行っていた |
| 6. 分からない |
| 7. その他(具体的に) |

問4 あなたは現在だれと一緒に住んでいますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。あてはまる番号がない方は、「11.その他」に○をつけてください。

1. 父 2. 母 3. 祖父 4. 祖母
5. 兄(人) 6. 姉(人) 7. 弟(人) 8. 妹(人)
9. 親類の人 10. 一人(寮など)
11. その他(具体的に ;)

問5 現在、あなたには、小学校入学前の兄弟姉妹はいますか？

1. いる 2. いない

Ⅱ あなたの、乳幼児（0歳～小学校入学前までの子ども）との関わりの経験についておたずねします。

問6 あなたはこれまでに、次あげるような経験がありましたか。あてはまる番号のところに、1つだけ○をつけてください。

しよつちゆう わりと あまり ぜんぜん
有った 有った 無かった 無かった

- 1) 赤ちゃんを抱いたこと……………1……………2……………3……………4
- 2) 赤ちゃんにミルクを飲ませたこと……………1……………2……………3……………4
- 3) 近所の小さな子どもの遊び相手をしたこと……………1……………2……………3……………4
- 4) 小さな子ども（兄弟姉妹でもよい）に絵本を
読んであげたこと……………1……………2……………3……………4

問7 あなたは、学校で子どもや子育てに関する勉強をしたことがありますか。あてはまる番号のところに、1つだけ○をつけてください。

1. ある ↓ 2. ない → 問12 へすすんでください。

問7で「1. ある」と答えた方のみ、回答してください。

問8 それはいつですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 中学1年生 2. 中学2年生 3. 中学3年生
4. 高校1年生 5. 高校2年生 6. 高校3年生 7. その他（具体的に ）

問9 その授業は、あわせると、どのくらいありましたか。あてはまる番号のところに、1つだけ○をつけてください。

1. 1回 2. 2回 3. 3回 4. 4回以上

問10 それはどんな教科ですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 家庭科 2. 社会科 3. 公民 4. 進路選択の授業
5. ホームルーム 6. 総合的学習の時間
7. その他（具体的に； ）

問11 それはどのような形態でしたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 教科書、または先生の話やビデオなどでの授業
2. 実際に保育所や幼稚園に行つて、子どもを見る体験の授業
3. 実際に保育所や幼稚園に行つて、子どもと遊んだりする体験の授業
4. 学校でのボランティア活動
5. その他（具体的に； ）

問21 あなたは、乳幼児を子育て中の母親の生き方について、以下のうち、特になにを大切にすべきだと考えますか。次の中から、1つだけ選び、○をつけてください。

- | | | |
|----------------------------|-----------|----------------|
| 1. 子どもと関わること | 2. 仕事をする事 | 3. 趣味や教養を高めること |
| 4. 近所の人たちと協力しあう地域活動やボランティア | 5. 家事 | |
| 6. その他(| |) |

問22 あなたは、次のような男の人をどう思いますか。あてはまる番号のところに、1つだけ○をつけてください。

- | | | | | |
|--|------|-------|------|-------|
| | やや | どちらとも | やや | わるい |
| | いい感じ | いい感じ | いえない | わるい感じ |
| | | | | 感じ |
- 1) 料理をする男の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 2) 仕事より家庭を大事にする男の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 3) 掃除や洗濯をする男の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 4) 子どものめんどうを見る男の人……………1……………2……………3……………4……………5

問23 あなたは、次のような女の人をどう思いますか。あてはまる番号のところに、1つだけ○をつけてください。

- | | | | | |
|--|------|-------|------|-------|
| | やや | どちらとも | やや | わるい |
| | いい感じ | いい感じ | いえない | わるい感じ |
| | | | | 感じ |
- 1) 料理をする女の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 2) 仕事より家庭を大事にする女の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 3) 掃除や洗濯をする女の人……………1……………2……………3……………4……………5
- 4) 子どものめんどうを見る女の人……………1……………2……………3……………4……………5

問24 あなたは、子どもを育てることについてどのように感じていますか。あてはまる番号を、1つだけ選んで、○をつけてください。

- | | | | | | |
|--|-------|------|-------|-------|--------|
| | とてもそう | ややそう | どちらとも | あまりそう | まったくそう |
| | 思う | 思う | いえない | 思わない | 思わない |
- 1) 子どもを育てることはつらい仕事だと思う……………1……………2……………3……………4……………5
- 2) 子どもを育てていると、自分の好きなことができないと思う……………1……………2……………3……………4……………5
- 3) 子どもを育てていると、世の中から取り残されてしまうと思う……………1……………2……………3……………4……………5
- 4) 子どもを育てていると、子どものことばかりで
視野が狭くなると思う……………1……………2……………3……………4……………5

とてもそう 思う	ややそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
-------------	------------	---------------	---------------	----------------

- 5) 子どもを育てることは、すばらしい仕事だと思う……………1……………2……………3……………4……………5
- 6) 子どもを育てることによって、自分もまた成長できると思う……………1……………2……………3……………4……………5
- 7) 子どもを見ていると、元気づけられる……………1……………2……………3……………4……………5
- 8) 子どもを育てることは、自分の人生に充実感をもたらす……………1……………2……………3……………4……………5

問25 現在、日本では子どもの数が少なくなってきています。あなたは、それについて、どのように思いますか。あてはまる番号を1つだけ選んで、○をつけてください。

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 深刻な問題だと思う | 2. あまり心配することはないと思う |
| 3. 望ましいことだと思う | 4. あまり考えていない |

ご協力ありがとうございました。